

雑司ヶ谷研究 4

——雑司ヶ谷の領域の変遷に関する研究——

Zoshigaya Study 4
—Chronological Change of the Zoshigaya Area—

住居学科 古賀 碧 葉袋 奈美子
Dept. of Housing and Architecture Midori Koga Namiko Minai

抄 録 都市インフラの整備との関連の中で、江戸期から現在に至るまでに、どのように雑司ヶ谷のつく地名が変化してきたのかを確かめた。江戸時代の絵図から順次確かめると、江戸時代の村の領域が現在の氏子領域と重なる事や、参詣路が当時の領域の形成だけでなく現代の都市計画にも影響している事などが判る。明治期以降では、地名が目まぐるしく変更されていく中で雑司ヶ谷に組み込まれる場所や雑司ヶ谷から外される場所について確かめ、鉄道や街路の整備によって地域が細分化された事、都市インフラの整備の影響下で1963年の住居表示変更が行われ雑司ヶ谷の領域が狭まったことが確認できた。また、宗教的なコミュニティについても考察し、氏子領域や雑司ヶ谷御会式の組織の広がりや雑司ヶ谷の領域との間に関連性があることを確認した。

キーワード：雑司ヶ谷、古地図、地名

Abstract This paper reviews chronological change of the Zoshigaya area by comparing maps from the past 2 centuries. The pilgrimage road to Kisimojin became a major street after the Meiji period. A railway station and a city planning road divided Zoshigaya into several different areas. After the residence indication system started in 1963, Zoshigaya was confirmed to be the present small area.

Keywords : Zoshigaya, ancient map, place name

1. はじめに

地域の様子や領域性が時と共に変化することは、都市部においては当然のことだろう。居住者の入れ替わりが頻繁で、習慣や考え方の異なる人が共に暮らすことで新しい文化を創り出すことが都市に暮らす魅力の一つでもある。対して、社会が均質化していく中、それぞれの地域の独自性やまとまりが弱まっているという指摘も数多くある。地域としてのまとまりや連帯感というものは、得てして都市型住民にとっては煩わしいと認識されがちであるものの、東日本大震災以降の日本においては地域での絆が大切だと認識され、都市部においても、人と人との結びつきや地域での連帯に基づく災害への備えが

検討され始めている。

本稿は、木造密集市街地の一つとして知られ、また鬼子母神をはじめとした風情ある観光地としても知られる雑司ヶ谷を様々な角度から読み解き、今後の都市計画のありかたを検討するための継続的な研究の一つである。当該地域がどのようなまとまりで活動しているのかを検討するための基礎的な研究として、かつては広域に及んでいた雑司ヶ谷の領域が現在のように小さくなってしまった経緯を確かめ、地域の独自性やまとまりについて再認識するための基礎的な情報を整理する。

本稿で取り上げる範囲の雑司ヶ谷は、明治維新以降現代に至るまで雑司ヶ谷という地名が付けられた豊島区内の場所を指す。文京区内においても、現在

の目白台二・三丁目と関口三丁目の一部に雑司ヶ谷町と指定されていた場所が確認されるが、この事については別稿で論考することとし、本稿では、現在の豊島区内のみの状況を確認することとする。ここで扱う雑司ヶ谷の領域を色付けし、さらに現在の雑司ヶ谷一・二・三丁目の領域を囲って示したものが図1*1である。本稿では、このような変化が起きた事と周辺の都市インフラの整備との関係とを確かめ、都市インフラの整備が街の境界域の設定に与える影響を考察する。



図1 雑司ヶ谷の地名が付いたことのある場所

なお、このような都市インフラと境界域に関する研究は、三星昭宏²⁾をはじめとした交通計画の面からの研究があるが、これらは移動の実態や認識に関する研究であり、社会的にどのように位置づけられていたかといった内容については見られない。また、橋本健一は雑司ヶ谷の地形と地名の変遷を辿っている³⁾が、コミュニティとの関連についての指摘は十分ではない。本稿では、そのような視点からも都市づくりについて確かめたい。

2. 雑司ヶ谷と表記された範囲の変遷

2.1 江戸期の雑司ヶ谷の領域

江戸時代、当該地域は武蔵国に位置づけられていた。図2に示す「武蔵国豊島郡雑司ヶ谷村繪圖」⁴⁾(明和9・1772年)は、農村としての雑司ヶ谷村の領域を表した絵図である。この絵図では、鬼子母神周辺の畑地のほかに西側に長く伸びる敷地を有している事と、高田村や下落合に接する形で雑司ヶ谷村の

敷地が伸びている事が確認できる。現在の池袋駅西側に位置する弦巻川の源泉であるとされる丸池にあたる池が描かれており、その周辺から西側に延びる範囲も雑司ヶ谷の村であった事も判る。居住者の名前も詳細に描かれており、南西は鬼子母神、北は御鷹方御組屋敷(御鷹方御用屋敷)、東は本浄寺の辺りまでが人の住む居住地であったと見受けられる。



図2 武蔵豊島郡雑司ヶ谷村絵図

雑司ヶ谷の南側の境界となる道は『鬼子母神道』と名付けられ、現在では目白台2丁目交差点の西にある細い路地を北西に進み鬼子母神の敷地の南側を通る道に当てはまる。このことから、現在の雑司ヶ谷二・三丁目の南部は、この頃は雑司ヶ谷村ではなく高田村だったと読み取ることができる。

図3*2に、現在の地図に図2の領域を重ねたものを示す。



図3 武蔵豊島郡雑司ヶ谷村絵図に示される雑司ヶ谷の範囲

図2から時代は下り、江戸の町民が雑司ヶ谷を護国寺に並ぶ観光拠点と認識していたことがあったと読み取ることのできる地図も見られる。

「嘉永新鐫雑司ヶ谷音羽繪図」*³（嘉永6・1853年）を図4に示す。護国寺を中心とする音羽と並べて表記されているのが、法明寺および鬼子母神を中心とする雑司ヶ谷である。鬼子母神は子育ての神様としての信仰が篤く、江戸の中心地から遠いにも関わらず多くの参詣者を集め、それにより雑司ヶ谷は鬼子母神信仰の土地として認識されていた。それに伴い、鬼子母神の参道には茶屋を始めとする多くの店が立ち並び大いに賑わっていた⁶⁾。この参道は宝永7（1710）年に町屋が許可され延享2（1745）年には町方の支配となった*⁴一方で、鬼子母神堂を始めとする宗教施設の周辺は農地であり、高田や音羽や長崎といった地域に囲まれた中に雑司ヶ谷が位置づけられていたことも確認できる。



図4 嘉永新鐫雑司ヶ谷音羽繪圖

また、図2の内容とは大きく異なる表記が幾つか見られ、特に顕著なのが、現在の目白通りに当たる道の位置付けである。図2では村の堺として明確に描かれている南側の道が、図4では非常に細い路地として描かれているのである。鬼子母神への参道として商店の立ち並ぶ賑やかな道がこの頃には形成され、観光地図的意味合いの強い音羽村絵図で表現されている。高田村の領域内の道が、雑司ヶ谷近辺での重要な位置づけの道になったことが確認される。

図5*⁵は、安政6（1859）年に作成された江戸の

地図である。この図では、鬼子母神の更に西側に鼠山の紹介がある。鼠山は、天保5（1834）年に建立され、その後わずか8年で廃寺・取潰しとなった感應寺が在った場所である。ここから、村の端という位置づけであった雑司ヶ谷村の西側が、江戸末期には寺社地としての認識が強くなっていった事が判る。



図5 安政江戸図

一方で、江戸時代の後年の管轄を示す図として示されている朱引図（図6）*⁶を確かめると、雑司ヶ谷村は墨引内に位置づけられており、江戸の町奉行が管理する場所となっている。



図6 旧江戸朱引内図

2.2 明治初・中期の領域

明治時代に入り、地域の区分の名称が目まぐるしく変化する。本節では、豊島区史地図編¹⁾に示された町名の変化を参考にして確かめる。

明治維新を経て明治2(1869)年、江戸時代の朱引をもとに改定された朱引のうち東京府下朱引外の郷村地が5区に区分される。その際、雑司ヶ谷は地方2番組の中の雑司ヶ谷村として位置付けられた。後に、領域が変化していく中で雑司ヶ谷に組み込まれることとなる土地は、増上寺領巢鴨村については地方3番組に位置付けられ、御用屋敷や武家地・寺社地の一部についてはこの5区の区分には入らない扱いであった。

その後、明治4(1871)年に3回、その翌年と翌々年に1回ずつ、朱引外の区分が変更された。明治5年の変更の際には、幕府の御用屋敷の類も含む武家地や雑司領を含む寺社地にも雑司ヶ谷の地名が付けられた。これらの敷地には雑司ヶ谷町あるいは雑司ヶ谷旭出町と命名され、雑司ヶ谷村とは区別して扱われていた。この区別は、明治6年や明治11年における改正の際にも引き継がれた。

明治11(1878)年に群区町村編制法が施行された際には、寺社地・武家地のうち、現在の雑司が谷一・二・三丁目と南池袋二・四丁目に位置する土地が小石川区となり、その他の寺社地・武家地は雑司ヶ谷旭出町と名付けられた。

明治18(1885)年には、日本鉄道の品川から赤羽への支線の駅の一つとして目白駅が開業した^{*4}。当時は目白駅の両隣駅は新宿駅及び板橋駅であり、池袋をはじめとした近隣の駅は設置されていなかった。

目白駅が開業していない頃の目白通り沿いでは、西に隣接する下落合村から鬼子母神参道付近に至るまでは田畑が広がるのみの土地利用だったが⁸⁾、明治42年には、市街化が進んでいることがわかる。目白通りとの交差部に駅が設置された事を鑑み、目白通りが当該地域の中でも主要な位置付けの道と

なっていたと推測できる。目白通りを中心に、特に雑司ヶ谷村であった地域の田畑であった場所が、順次市街化していく様子が図7から読みとることができる。

2.3 明治後期・大正期・昭和初期

明治後期以降は、急速に東京の人口が増えて都市が拡大していく時期である。雑司ヶ谷も市街地化が進み、図7^{*7}に示すように田畑が住宅地になっていることが確認できる。

明治22年になると市町村制が施行される。このとき雑司ヶ谷村は高田村に組み入れられ、小石川区に配されていた雑司ヶ谷町は高田村大字雑司ヶ谷町となり、同じ領域に統合された。

また、大正8(1919)年に見直された市区改正条例に基づく計画では、図8⁹⁾に示すように、図2にも記されていた雑司ヶ谷村内を通る板橋道及び高田村内を通る宿坂を拡幅する形で明治通りが示された。この近辺の明治通り開通は昭和7～10年であった。

その後、大正12(1923)年1月に行われた耕地整理により、高田町内の大字小字の区域が変わった。それに伴い、雑司ヶ谷領域の西端に当たる現在の西池袋二丁目近辺は西武線に沿う場所で耕地整理が行われ、大字巢鴨字代地や大字小石川字狐塚が大字雑司ヶ谷字西谷戸大門原の中に新たに入ったり、逆に、大字雑司ヶ谷字西谷戸大門原が大字巢鴨字代地に入ったりと一部変化があるのだが、これは僅かな変化である。対して雑司が谷の中心部分については、区画整理のみならず耕地整理すら行われない状態であった。

同年9月には、関東大震災で発生した火災により



図7 明治末期から大正にかけての雑司ヶ谷における市街化の様子



図 8 東京都市計画地域並地区指定ノ件 1

東京の東部が大きな被害を受け、焼け出された多くの人が雑司ヶ谷に住み始めた。震災による火災の被害の無かった雑司ヶ谷地域は耕地整理が終わったばかりの地区も含めて恰好の受け皿となり、これが、現在に続く木造密集市街地の形成に大きく影響したと考えられる。

昭和 7 (1932) 年になると、拡大する都市に対応して区制が施行される。改めて町名が見直され、雑司ヶ谷は図 9^{*8} のように一丁目から七丁目までに整理された。

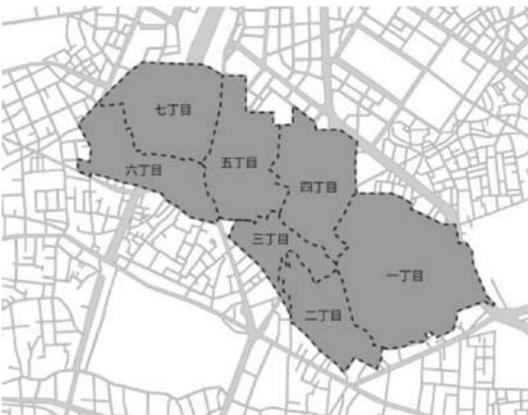


図 9 雑司ヶ谷一丁目から七丁目

その際、かつて寺社地や武家地であった『旭出』の名がつけられた土地とその外延部等から、雑司ヶ谷の地名が消えた。中でも雑司ヶ谷領域北部の土地

においては『旭出』という表記も『日出』に変わっており、これは同年に開通した現在グリーン大通りと呼ばれている都道 135 号線によって当該地が雑司ヶ谷の中心部から切り離され、その道路計画に伴って異なる表記の町名が提示されたのだとも推測できる。

2.4 戦前から戦後の変化

その後昭和 20 (1945) 年には、第二次世界大戦中の空襲で雑司ヶ谷近辺も火災の被害を受ける(図 10 に示される色付けされた部分が戦災消失区域にあたる)¹²⁾。戦後すぐにバラックが建ち始めて多くの住民が居住するようになるが、翌年 4 月には戦災復興院から戦災復興区画整理事業の計画が示され、雑司ヶ谷区域内の池袋近辺は区画整理予定地内に入った。しかし、池袋駅東側で比較的早く実施されて昭和 35 (1960) 年には換地処分が終わり現在のまちの基盤が整った一方で、雑司ヶ谷の中心的な場所では整備が進まず、戦前に整えた基盤を中心とした市街地の発展を迎えた。

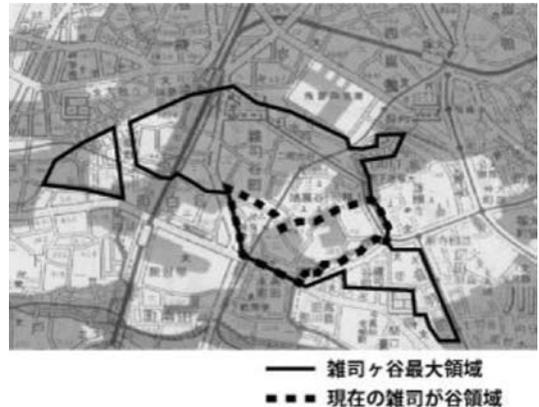


図 10 帝都近傍図戦災焼失区域表示

昭和 39 (1964) 年には住居表示が実施され、現在利用している住居表示となる。これにより大きく雑司ヶ谷の範囲が狭まることとなり、明治通り以西の土地から雑司ヶ谷の名前が消失した。

3. 住民組織との関わり

3.1 大鳥神社の氏子

大鳥神社の氏子の現在の領域を示したものが図 11^{*9} である。これは、2 章で示した江戸明和期の

雑司ヶ谷村の領域にほぼ等しい。大鳥神社は氏子領域の南に寄った位置にあるが、これはもともと雑司ヶ谷の集落の人家の多かった部分が南側に寄っていたからだろう。

雑司ヶ谷の西側方面は目白駅開業と目白通り沿道という立地が影響して宅地化が進み『雑司ヶ谷』の地名も消失してしまったが、雑司ヶ谷の氏子圏域という観点においては江戸期から続く性質を失っていない事が判る。また、歴史的には寺を中心として栄えてきた地域でありながら神社の氏子の範囲と重なり合うという事実は非常に興味深い。

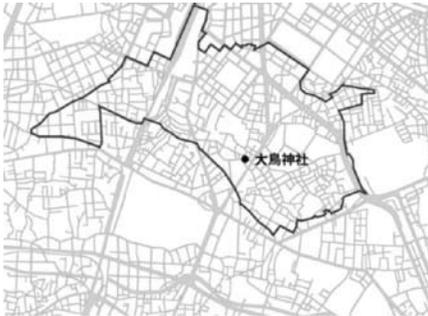


図 11 大鳥神社の氏子の範囲

3.2 御会式の講社

御会式は、日蓮宗開祖の法要でありながら賑やかな練り歩きを行うことで知られる。また、全国の日蓮宗寺院で信者によって行われる宗教行事であるが、雑司ヶ谷では宗教に関わらず地元住民が町会や同好会的単位で組織を形成し、10月16から18日までの三日間に実施される練供養に参加する。この練供養に際し使用される万燈は、お仮屋と呼ばれる仮設倉庫に収められるのだが、このお仮屋を設置する場所は講社に所属する住民の地域性がある程度反

映していると考えられる。現在は、お仮屋の設置場所は明治通り以東にしかないが*10、法明寺現住職によれば、戦前は御会式の講社が目白駅近くまで広がっていたという*11。これは、雑司ヶ谷地域が第二次大戦の被害を受けたために御会式の活動の衰退や住民の入れ替わりが起り、後に再興を果たすものの広幅員の道路が住民の意識を分断してしまったことで、雑司ヶ谷の中心地にある法明寺から明治通りより西側の住民を切り離してしまう結果になったのだと考えられる。

4. 雑司ヶ谷の領域縮小の背景についての論考

4.1 江戸時代の概略

雑司ヶ谷は、農村ではあるものの寺の雑司領が多くあり、武家地ばかりでなく將軍のための御鷹部屋もあり、鬼子母神という信仰を集める拠点がある、多様な側面を持つ村であった。行政面では墨引内であり、また、護国寺と並ぶ行楽地として認識される華やかな地域であった。

領域は現在の雑司ヶ谷のそれよりも広域に亘り、西は目白駅よりも西側へ、北は池袋駅前よりも北側に広がっていた。しかし東側は護国寺を越えることはなく、南に至っては現在よりも範囲が小さかった事が確認できる。

4.2 明治期以降の変化

明治期に入り、雑司ヶ谷領域の扱いは大きく変化する。武家関連地とそれ以外の領地とが別扱いであった江戸時代の性質は明治初期に解消され、空間的な領域を一帯で扱うようにならった。ここでは、江戸時代の土地利用のありようを意識しつつ、明治期以降の雑司ヶ谷の領域がどのように変化したのかを、図 12*12 に示し、空間的な変化とともに振り返る。

1772 年発行 武蔵国豊島郡 雑司谷村絵図	1880 年発行 東京近傍図 ：明治 20 年	1922 年発行 最新式大東京 地図番地入	1934 年発行 模範新大東京全圖	現在

図 12 『雑司ヶ谷』という言葉がつく地名の領域の変化

1) 北側方面

北側近辺の比較的武家地が多かった場所は、長い間『旭出』という町名・字名が残っていたことで他との性質の違いがわかるような形を残しながら雑司ヶ谷に組み込まれていた。しかし、池袋駅前の現在のグリーン大通りができたことで通り以北の『雑司ヶ谷旭出』という地名が消され『日出』に変わった。その後、当該地域は池袋の駅に近いことから、鉄道の拠点駅でありかつ商業施設が集積している池袋の地名が冠されることとなった。寺の場所は変わらないものの農地であった場所は市街化が進み、地名は池袋の一带と認識されるような形へ変わったのである。

現在のグリーン大通りの南側についても、寺地を除く場所では区画整理により道路網が変わり、かつての農地の面影はなくなり、池袋駅の駅勢圏として市街化が進展してきた。そして現在の住居表示では、池袋の地名がつけられている。

2) 西側方面

目白駅ができたことにより、その周辺が従前の農地中心の土地利用から、駅を利用する人のための町として発展を遂げてきた。また、明治通りが開通したことによって雑司ヶ谷の中心地から明確に切り離され、雑司ヶ谷の名前は住居表示にも、建物名にもみられなくなった。

3) 東側方面

東側については、従前から護国寺の領域との境で拡張も縮小もしていない。南東方向には、小石川区(文京区)方面に延びる雑司ヶ谷の地名があるが、この扱いについては別途検討することとする。

4) 南側方面

南側については、江戸時代には鬼子母神参道として位置付けられていた不忍通りと目白通りの交差点近くから北西に延びる道沿いが、村境であった。しかしかつては高田村の道の一つであった現在の目白通りが、鬼子母神へ参詣する客の沿道として発展し、特に目白駅へ続く道として明治以降の都市計画の中でも重要な道路と位置付けられて拡幅整備が進められ、旧高田村内を分断する状況となった。結果、住居表示の際には高田村の北部が雑司ヶ谷に組み入れられることとなった。

4.3 都市基盤整備との関連

本項では、都市基盤整備と町名の変化について、

改めて整理を行う。

明治期に設置され始めた現在の山手線にあたる鉄道の存在は、雑司ヶ谷の領域に大きな変化を与えた。雑司ヶ谷領域に近い目白駅も池袋駅も田畑しかなかった場所に開かれたが、鉄道の利用が市民の足として重要な位置づけになるに従い、駅周辺に住宅や商業施設が整備されることとなった。今や雑司ヶ谷であった部分の西半分は目白の地名を冠した地域となっており、人々にとっての存在感は非常に大きい。池袋駅についても、かつては雑司ヶ谷村だった部分が池袋の駅勢圏となり池袋の一部としての地名に変更されていった。

池袋駅前から東へ延びるグリーン大通り(都道135号線)は昭和初期に設置され、雑司ヶ谷村の北側部分を、地名の面からも雑司ヶ谷から切り離す役割を担った。明治通りの整備も、地名の変更こそ昭和39(1964)年まで無かったものの、現在では通りを境に目白の地名のつく住居表示になっていることを見れば、結果的に雑司ヶ谷村から目白駅を中心

表1 雑司ヶ谷に含まれた領域の江戸時代と現代との町名比較

江戸時代初期	1932(昭和7)年 豊島区成立	1964(昭和39)年 住居表示施行
雑司ヶ谷村	雑司ヶ谷 一～七丁目 日出町 一～三丁目	西池袋一丁目 東池袋一・五丁目 南池袋一～四丁目 雑司が谷一～三丁目
自証院領 雑司ヶ谷村	雑司ヶ谷町 一・三丁目	雑司が谷一～三丁目 南池袋四丁目
増上寺領 巢鴨村	雑司ヶ谷 六丁目	西池袋二丁目
寺社地	日出町 二丁目	南池袋二丁目
武家地・寺社地	雑司ヶ谷町 一丁目 日出町 三丁目	南池袋一・二・四丁目
修験屋敷	目白町 四丁目	西池袋二丁目 目白三・四丁目
武家地	日出町三丁目 雑司ヶ谷町三丁目 高田本町四丁目	東池袋一・七丁目 雑司が谷二丁目 目白三丁目
鷹方御用屋敷	日出町三丁目	東池袋一・四丁目 南池袋二丁目
小石川村	雑司ヶ谷六丁目 目白町三丁目	西池袋二丁目
下高田村	高田本町 一・二丁目	雑司が谷二・三丁目
済松寺領 下高田村	高田本町二丁目	雑司が谷二丁目
芳心院領 下高田村	高田本町一丁目	雑司が谷二・三丁目

とした地域を切り離す要因となったと言えよう。逆に、目白通りは、高田村内にあった参詣道が発展したものであるが、拡幅に伴い高田村内から雑司ヶ谷側の敷地を、雑司ヶ谷の領域に組み入れることになった。

道路や鉄道の整備は、都市を整備していく上で欠かせないものである。だが、線的に繋がる道路や鉄道網は、地域を分断していく道具となりうるものが改めて確認された。

5. おわりに

本調査を通して、江戸時代から続く地域のまとまりが住居表示を通して大きく変化したこと、大街道が整備されることにより地域の繋がりに大きな変化をもたらす事が確認できた。それらの変化の中でも地域組織としての氏子のネットワークが存続する可能性があることは確認されたものの、居住者が頻繁に入れ替わる時代において氏子という要素が地域の生活を支えるネットワークとなりえているかは疑問である。一方で、御会式の講社は組織の広がり容易に変化する性質を持つが、広幅員道路に阻まれる形でネットワークが拡がりにくい状況となっていることが確かめられた。

大都市において、都市インフラを効率的に設置することは重要な課題である。しかし同時に、都市インフラの整備により分断されてしまう住民のネットワークへのフォローもまた、重要な課題であろう。

昨今、災害への備えという視点からも、地域のネットワークが『絆』という言葉で見直されているが、地域の絆を形成しようと呼びかける一方で絆を分断しかねない都市整備を進めることには矛盾を感じる。我々は都市のインフラ向上にのみ注目するのではなく、地域が持つネットワークを断ち切るのしないよう努める必要があり、ネットワークを壊さざるを得ない状況になった折には、新しい形のネットワークを築きあげられるよう特別な支援を考える等、対策を講じることが肝要なのではないだろうか。

註

- * 1 参考文献1の地図をもとに作成した。
- * 2 図2 武蔵国豊島郡雑司ヶ谷村絵図をもとに作成した。
- * 3 戸松昌訓：嘉永新鐫雑司ヶ谷音羽繪圖，尾張屋清七（1852）⁴⁾

- * 4 平成25年2月19日開催 第4回豊島区都市計画マスタープラン改定検討委員会 参考資料2より
- * 5 作成者不明：安政江戸図，須原屋茂兵衛（1859）国際日本文化研究センターホームページ <http://www.nichibun.ac.jp/ja/> より
- * 6 参考文献7をもとに作成した。
- * 7 参考文献9に収録されている「東京近傍1万分1地形図 1909（明治42）年測図」，同「1916（大正5）年第1回修正」，同「1921（大正10）年第2回修正」より抜粋した。
- * 8 参考文献11をもとに作成した。
- * 9 参考文献13をもとに作成した。
- * 10 参考文献14に以下の調査結果が示されている。星で示した所が万灯設置場所である。



参考文献14の調査結果

- * 11 2010年に実施した法明寺住職近江氏へのインタビューでの発言。
- * 12 それぞれ図2，参考文献8・15・16・17をもとに作成した。

参考文献

- 1) 豊島区史編纂委員会：豊島区地図編 下，東京都豊島区，102（1974）
- 2) 三星昭宏：土木計画学研究・論文集，3，49（1986）
- 3) 橋本健一，仲川岳人，小野木夢，ヤニック・アンドレア，中村良夫：地名分析を通じた東京雑司ヶ谷地区の空間変容に関する研究，ランドスケープ研究，vol. 60，5，573（1996）
- 4) 豊島区立郷土資料館：豊島区地域地図 第5集，豊島区教育委員会（1992）

- 5) 豊島区立郷土資料館：豊島区地域地図 第3集, 豊島区教育委員会 (1992)
- 6) 斎藤幸雄：江戸名所圖會 二, 有朋堂書店, 641 (1927)
- 7) 作者不明：旧江戸朱引内図 (東京公文書館ホームページ <http://www.soumu.metro.tokyo.jp/01soumu/archives/index.htm> より)
- 8) 陸地測量部：東京近傍図 明治20年 (内題) 東京近傍中部 (1886) (国際日本文化研究センターホームページより)
- 9) 豊島区立郷土資料館：豊島区地域地図 第4集, 豊島区 (2011)
- 10) 作者不詳：東京都市計画地域並地区指定ノ件1 (内題) 東京都市計画地域指定参考図 (国立公文書館デジタルアーカイブ <https://www.digital.archives.go.jp/> より)
- 11) 植野録夫：東京都区分詳細図豊島区, 小林八洲男・園部部・日地版本株式会社 (1956) (国際日本文化研究センターホームページより)
- 12) 亀井豊治：帝都近傍圖 (内題) 戦災焼失区域表示, 熊谷敬一・日本地図株式会社 (1946) (国際日本文化研究センターホームページより)
- 13) 財団法人豊島区街づくり公社：知れば知るほど豊島がおもしろい, 宝島社 (1994)
- 14) 奥井麻子・葉袋奈美子：日女大紀要 (家政), **59**, 97 (2012)
- 15) 木崎龍尾・小川彦平：最新式大東京地圖番地入, 東京日日新聞, 精美堂 (1922) (国際日本文化研究センターホームページより)
- 16) 文彰堂編輯部・佐藤昌次：模範新大東京全圖, 文彰堂 (1934) (国際日本文化研究センターホームページより)
- 17) 作成者不明：新生東京都都市計画図 (内題) 道路緑地配置版新, 西澤太郎・松島三郎・三和版本株式会社 (1946) (国際日本文化研究センターホームページより)